

## 植田 誠著 『中世の寺社焼き討ちと神仏冒瀆』

山形大学地域教育文化学部 教授 大喜直彦

### はじめに

あなたは、「神仏冒瀆」を知っているか。「神仏」を「冒瀆」するとは、刺激的なイトルではないか。本書では、「神威超克」「神仏恫喝」「神仏唾棄」などの刺激的な表現がキーワードとなっている。この刺激的な用語は著者が、論旨を端的に示すものとして造語したものである。

中世人が神仏に抗う事実をテーマにした本書、これまで神仏の権威は絶対と無条件に理解されてきたことを考えれば、ここには新たな神仏と中世人との距離感が浮き彫りにされているのである。

日本史研究でも、あまり聞き慣れないキーワードとした本書の著者は、植田誠氏です。氏は別府大学史学科に所属され、田村憲美先生に師事し日本中世史（宗教史）研究をしてきた。田村先生は中世村落史研究の権威で、私もよく学ばせてもらった一人である。

さて、植田氏は、田村先生のご指導のもと、民衆史の世界へ、さらに宗教史の研究に目を向けたのである（「あとがき」参照）。

### 1 本書の目的

本書の目的は、「序章」で次のように示されている。

中世は宗教・神仏が大きな影響力を発揮した時代であった。（中略）

その一方で、宗教的事象に疑念を抱いたり、それが昂じて「神威超克」と呼ぶべき行為言動に及ぶなど、宗教性の優位とは真逆の力学も中世前期の段階から働いていた。（一八頁）

そうした宗教環境（神仏の力が取り巻く世界―大喜注）にありながら、時としてそれに抗う行為言動Ⅱ「神威超克」も苛烈を極めたのである。中世人が「神威超克」に及んだ原因と、それを可能にした要因Ⅱ「神威超克の論理」はどのようなものであったか。「神威」・神仏との角逐に際して生じた罪業意識や神罰仏罰の恐怖・後ろめたさをいかに克服し得たのか。こうした事態に遭遇した中世人の揺れ動く心性をどのように理解するか。（二二頁）

本書はこの目的のため、第Ⅰ・Ⅱ部、各部各四編の構成がとられている。

### 2 本書の構成

ここでは本書の構成と内容を説明する。構成は以下の通りである。

序章 中世宗教史研究の達成・課題と本書の構成

## 第I部 神威超克の実態と正当化の論理

第一章 中世における寺社焼き討ちの実態と神威超克の論理

第二章 寺院中核焼き討ち考

第三章 寺社焼き討ち正当化の方便の思想的考察

第四章 墓の聖性とその破壊・冒流

## 第II部 神仏と中世人の角逐

第一章 参籠祈願の場における神仏恫喝について

第二章 戦国時代における神仏唾棄について

第三章 織田信長の信心・不信心の様相―中世宗教史のなかの信長

第四章 信仰秘匿の実態とその思想的背景―中世・近世初期を対象に

終章 まとめと課題・展望

初出一覧／あとがき／索引 巻末

内容をまとめると、以下の通りである。

序章は、本書の目的やこれまでの研究史が示される。

第I部第一章は、中世を通じて広範に行われていた寺社焼き討ちを検討したもの。

第二章は、前章の論議を深めたもの。聖性の度合いが高い「場所」と「モノ」の焼き討ちについて考察する。具体的には、本堂（金堂）と仏像（本

尊）の焼き討ちを論じたもの。

第三章は、寺社焼き討ち正当化の方便の形成過程と思想的背景を論じたもの。

第四章は、墓（卒塔婆）の破壊・冒流を論じる。墓が聖性を帯びた「モノ」と観念されており、死者と生者の交感装置として、破壊・冒流を考察する。

第II部の第一章は、神仏冒流として「神仏恫喝」を取り上げたもの。祈願した者がその願いが期待できない場合、神仏を恫喝し、無理強いしても祈願を成就させようとする。このような行為を可能にした要因を探る。

第二章は、神仏唾棄を考察したもの。

第三章は、織田信長個人の信心・不信心とともに同時代の宗教環境を考察したもの。

第四章は、信仰を隠す行為について論じたもの。弾圧・迫害により信仰を表明できない状況を、ここでは「信仰秘匿」とする。

終章は、全体のまとめと課題、展望である。

## 3 研究史上の位置

大づかみに言うと、戦後の日本史研究は社会経済史が主軸で展開していた。中世史でいえば、荘園制の研究であった。そのなかで、宗教史や信仰史は主軸な研究とはいえなかった。旧来の宗教史は、政治史の垂流的研究が多く、信仰史は民俗学的な視点のものが多かった。

しかし、一九八〇年代に入ると社会史が台頭し始め、これまで経済史中心であった視点から、日常生活や女性・老人、心性に注意が向けられるようになった。そして、宗教や信仰にも新たな視点が開かれたので

ある。同時に、これまで古文書・日記などがメインであった史料は、絵画、民俗、物語、伝承など多方面に広がった。この点は「序章」にも記されている。本書も研究の流れでいうと、この八〇年代の流れをくんでいるといえる。

氏は前記研究の流れをくみ、「中世における寺社焼き討ちの実態と神威超克の論理」(『史学論叢』四四、二〇一四年、本書第一部第一章)を発表して以後、諸論文を次々と発表し体系的にまとめ、本書を刊行し、世に問うことになった。

このようなテーマは、個々に注目され研究されることはあったが、本書のように体系的になされることは多くなかった。現在では以前に比べると、増えたといえるが、やはり多いとはいいがたい。このような研究状況において、本書は意義ある一冊といえるだろう。

## 最後に・・・

本書について気の付いた点に触れておきたい。まず史料が豊かな点である。第一章を例に取り、使用された史料名をあげてみよう。

笠置寺縁起 太平記 中院一品記 田中文書 金剛寺経疏類奥書  
 鞆淵荘置文 後醍醐天皇軍法案 樵談治要 保元物語 兵範記  
 明月記 延慶本平家物語 玉葉 山槐記 一遍上人絵伝  
 勝尾寺焼亡日記 元暦文治記 続史愚抄 尊卑分脈 愚管抄  
 朝倉宗滴話記 両豊記 尊性法親王書状 扶桑略記 水左記  
 中右記 長秋記 吾妻鏡 閑居友 古事談 長谷寺靈驗記  
 三河物語 日本史 信長公記 北条記 三宝院文書 宇佐大鏡

縁起、古文書、日記、記録、物語、絵巻など多様な史料が確認できる。ここより、本書のテーマである信仰や宗教を扱うために、いかに多彩な史料が必要かわかるであろう。

本書の史料は【史料1】【史料2】と、基本的な形として独立させて引用され、他の研究者も利用しやすいように配慮されている。

史料を分析してそこから導き出された結果を論理的に整理して、叙述して論文は完成されていくが、本書のテーマは、元来対象史料が集めにくいものである。

このようなテーマは、まだ展開途中であり、対象史料も体系的に集められているわけではない。その条件のなか、史料を集めた苦労は想像にかたくない。

本書に集められた史料を、次の研究者が、有益に利用することを切に望むものである。

次に参考文献も豊かな点である。宗教史・信仰史の多くの論文が集められており、今後このような研究を進める上で、大変役立つものである。この論文群だけで、研究史を知ることができる。

本書は上記してきたような興味ある内容を多く含んでおり、この程度の文章で語れるものではない。本書が宗教史・信仰史研究を広げたことは間違いない、刊行意義は大きい。その意義を是非一読して確認してもらいたい。

なお、氏は、本年、『寺社焼き討ち』(選書、戎光祥出版、二〇二二年)を出版された。新刊は、今回取り上げた本書より気軽に読めることに重点をおいている。興味ある方は、合わせて新刊も一読して頂きたい。

(二〇二二年四月刊行 戎光祥出版 A5判 上製 三〇六頁)

【付記】私自身、植田氏と共通する研究をしてきた関係から、今回、書評を依頼され、お引き受けした。ただ、氏が努力した研究をうまく評価できたか、どうか、大変不安である。末筆になるが、至らない内容をお詫びするとともに、今後氏の研究が深化することを心より期待するものがある。